

2007年4月

## CSR 報告書の調査・研究にあたって留意すべき視点

NACS 東日本支部 コンプライアンス経営研究会

久新大 四郎

現在の CSR 報告書は、製造業のように環境を中心に据えたものから、サービス業の顧客満足 (CS) 経営・コンプライアンス経営に主体をおいたものまで、大変幅が広がっています。また、過去のメセナ報告・フィランソロピー報告、社会環境報告書、サステイナビリティ報告書の延長で来ているため、その歴史の長さや業種によって違いがみられます。

CSR 報告書は、形式の面でも内容の面でもまだまだ揺籃期ということができるようだと思います。一律の評価基準ではなく、背景も考慮に入れる必要もあるかもしれません。

企画会社に丸投げしていないか、お膝元の一般社員に読まれているかなども CSR の社内定着度をうかがうのには大切な点ですが、ワン・ウェイの調査・研究では見えてきません。

自ずから限界はあるものの、横並びで横断的に比較してみて、その中から“あるべき CSR 報告書の姿”が捉えられれば企業関係者に資するものがあると思います。

その意味で、単なる企業間の相対的な評価・点数付けではなく、これからの企業報告書への提案につながるものにこそ、この調査・研究の意味があるように思います。

当研究会の消費者視点での評価・提言が、少しでも日本の CSR 報告書の充実に貢献できれば意義のあることだと思います。

現時点、若干のレビューから得られた私の視点は以下の 8 項目です。共同作業を通じて共通の留意点、必要な視点が明らかになり、研究会としての評価軸に収斂できればよいと思っています。

### 【調査・研究にあたっての私の視点】

- 1) 誰にむけての報告なのか
- 2) 何を伝えたいのか
- 3) 読んでもらうための工夫や姿勢が見られるか
- 4) 謳われている内容は過去の実績の積み上げか、これから解決しなければならない課題なのか
- 5) ステークホルダー・ダイアログ (対話) を本当に重要と思い、実践しているか
- 6) ステークホルダーへの約束がトップ・メッセージとして語られているか
- 7) 報告書発行を経営活動の中に位置づけてきているか
- 8) 過去の CSR 報告書との連続性から、CSR の面で進歩・改善が読み取れるか

以上